

大規模関節リウマチデータベース“NinJa”が語る真実

松井利浩[†]第72回国立病院総合医学会
(2018年11月9日 於 神戸)

IRYO Vol. 74 No. 10 (447-449) 2020

要旨

「本邦関節リウマチ患者の現状と問題点を明らかにするための疫学調査を継続的にを行いその動向を評価する」ことを目的に、国立病院免疫異常ネットワーク (iR-net) を中心として、全国規模の関節リウマチデータベース「National Database of Rheumatic Diseases by iR-net in Japan ; NinJa」を2002年に構築した。以後、現在に至るまで調査を継続している。

その結果から、関節リウマチ患者の高齢化、発症の高齢化傾向が進行していることが明らかとなった。経年的に疾患活動性、身体機能、関節予後は改善しており、関節リウマチ関連手術は減少、それを支える薬物治療は著しく進歩、変化し、メトトレキサート (MTX) および生物学的製剤使用の増加、ステロイド使用の減少などが顕著である。生命予後の改善も認められるが、入院を要する患者は微減であり、感染症、悪性疾患、骨粗鬆症関連による入院が相対的に増加している。

NinJaは、本邦関節リウマチ患者全体の2-3%の情報を収集しており、本邦の関節リウマチ医療の実態に最も近いデータを大規模かつ継続的に集計している。さらに調査を継続し、その動向を注視していきたいと考えている。

キーワード 関節リウマチ, データベース, 高齢化

“NinJa” 登場の背景

関節リウマチの治療は、メトトレキサート (MTX) 使用率 (量) の増加や生物学的製剤の登場により著しく進歩したが、その過程で、それらにともなう利益および不利益の評価体制が十分ではなかった。臨床試験データでの評価は短期的であり、これらを長期的に調査していくためには、実臨床における大規模かつ継続的な観察が必要であった。

そこで、国立病院免疫異常ネットワーク (iR-net) が中心となり、「本邦関節リウマチ患者の現状と問

題点を明らかにするための疫学調査を継続的にを行いその動向を評価する」ことを目的に、「National Database of Rheumatic Diseases by iR-net in Japan ; NinJa」を2002年に構築し、現在に至るまで調査を継続している¹⁾²⁾。本講演では、NinJaデータをもとに、本邦関節リウマチ医療の現状や問題点について述べる。

本邦関節リウマチ医療の変遷と現状

1. NinJaとは？

国立病院機構相模原病院 リウマチ科 [†]医師

著者連絡先：松井利浩 国立病院機構相模原病院 リウマチ科 〒252-0392 神奈川県相模原市南区桜台18-1

e-mail : ninja02matsui@gmail.com

(2019年5月14日受付, 2020年4月10日受理)

Nationwide Database of Rheumatoid Arthritis in Japan; NinJa

Toshihiro Matsui, Department of Rheumatology, NHO Sagami National Hospital

(Received May 14, 2019, Accepted Apr. 10, 2020)

Key Words : rheumatoid arthritis, database, aging